

科目名	基礎漢方薬学		
英語名	Fundamentals of Kampo Pharmaceutical Sciences		
開講期	後期（秋学期） 月/1	選必区分	大阪医科薬科大学薬学部（必修）・関西大学（選択）
単 位	大阪医科薬科大学薬学部 2・関西大学 2/1.5（入学年度によって異なる）		
代表教員氏名	芝野 真喜雄		
代表教員以外の担当者			
授業の目的と概要			
漢方医学は、古代中国医学を基盤に、多くの臨床経験を積み重ね、独自に発展してきた日本の伝統医学である。また、その信頼性の高さから医療用医薬品として 148 処方の漢方製剤が薬価収載されるに至っている。さらに、近年では漢方薬の重要性が増し、実に 90%以上の医師が漢方薬の処方経験を持つ。すなわち、薬剤師はより専門的な漢方薬の知識が不可欠になっている。この授業では、薬学の立場から漢方薬を構成している個々の生薬の薬能について理解を深めることにより、漢方製剤を適正に使用できるための基礎知識を修得する。			
一般目標（GIO）			
本授業では、漢方薬の適用症や副作用などを覚えるだけではなく、漢方薬を構成している生薬の作用や役割を理解することにより、「考え、応用できる漢方」の基礎知識を修得する。			
授業の方法			
教科書を用いて講義形式の授業（対面形式）を主として、遠隔授業（ライブ配信あるいはオンデマンド配信）を一部取り入れて行う。また、各回の講義後に症例演習を出題し考察する時間を設ける。			
アクティブ・ラーニングの取組			
各回の授業後半で、症例を出し、学生個々で治療薬を考える時間を設ける。また、2 人から 3 人に治療方針を発表させる。 また、レスポンスを用いて症例について解答させる場合もある。			
成績評価			
大阪医科薬科大学薬学部：定期試験結果（85%）、レポート（15%）により評価する。 関西大学：最終レポート（50%）、出席状況（50%）により評価する。			
試験・課題に対するフィードバック方法			
試験答案を開示し、再試験受験対象者には解説を行う。（課題レポートの評価も開示する。）			

実務経験を有する専任教員名／実務経験を活かした実践的教育内容			
学位授与方針との関連			
薬剤師として医療に関わるための基本的知識、特に漢方薬と漢方医学の知識を身につける			
SDG s 17 の目標との関連			
3.すべての人に健康と福祉を／12.つくる責任 つかう責任			
関連する科目			
関連科目	生薬学(OC3007)、薬用天然物化学(OC3006)、漢方医学概論(MP4027)など		
臨床系関連科目・内容	漢方医学概論 (MP4027) 臨床現場で使用される漢方薬を適切に使用、服薬指導するために、漢方薬を構成している生薬の作用や役割について整理し、理解を深める科目である。		
教科書・参考書等（書名・著者・出版社）			
教科書	ミニマムファクター漢方生薬学（第2版） 芝野真喜雄 京都廣川書店		
参考書	図解漢方処方のトリセツ 川添和義 じほう エビデンス・ベース 漢方薬活用ガイド 松原和夫、伊藤美千穂 京都廣川書店		
授業計画			
回数	項目	到達目標・授業内容・コアカリ番号	準備学習
1	漢方医学の歴史と基礎 1 陰陽、五行論、気血水	漢方の歴史について概説できる。 【*】 漢方と中医学の特徴について説明できる。【*】 漢方の特徴について概説できる。 【E2(10)①-1】 陰陽、虚実、寒熱、表裏、気血水、証など、漢方の基本用語を説明できる。【E2(10)①-2】 漢方薬と西洋薬、民間薬、サプリメント、保健機能食品などとの相違について説明できる。【E2(10)①-4】 漢方医学における診断法、体質や病態の捉え方、治療法について概説できる。【E2(10)②-1】	指定した教科書に沿って授業を進めていくので、項目に挙がっている内容について教科書の基礎理論編を熟読するために2時間ぐらいの予習が必要である。 また、学習した内容については、参考図書などを利用し、理解を深めること。さらに関連する内容を参考図書などを用いて調べるために2時間が必要である。

		現代医療における漢方薬の役割について説明できる。【E2(10)②-3】 漢方薬の剤形と特徴について説明できる。【*】	
2	漢方医学の基礎 2 五臓、八綱、六病位	(同上) 漢方の歴史について概説できる。【*】 漢方と中医学の特徴について説明できる。【*】 漢方の特徴について概説できる。【E2(10)①-1】 陰陽、虚实、寒熱、表裏、気血水、証など、漢方の基本用語を説明できる。【E2(10)①-2】 漢方薬と西洋薬、民間薬、サプリメント、保健機能食品などとの相違について説明できる。【E2(10)①-4】 漢方医学における診断法、体質や病態の捉え方、治療法について概説できる。【E2(10)②-1】 現代医療における漢方薬の役割について説明できる。【E2(10)②-3】 漢方薬の剤形と特徴について説明できる。【*】	指定した教科書に沿って授業を進めていくので、項目に挙がっている内容について教科書の基礎理論編を熟読するために2時間ぐらいの予習が必要である。 また、学習した内容については、参考図書などを利用し、理解を深めること。さらに関連する内容を参考図書などを用いて調べるために2時間が必要である。
3	なぜ治療に用いられる漢方薬：葛根湯、麻黄湯、麻黄附子細辛湯	日本薬局方収載の代表的な生薬を列挙し、その基原、薬用部位を説明できる。【C5(1)②-1】 日本薬局方収載の代表的な生薬の薬効、成分、用途などを説明できる。【C5(1)③-1】 副作用や使用上の注意が必要な代表的な生薬を列挙し、説明できる。【C5(1)③-2】 漢方薬の薬効を構成生薬の薬能（古典的薬効）で説明できる。【*】	指定した教科書に沿って授業を進めていくので、項目に挙がっていることについて教科書を熟読し、あらかじめ、漢方薬を構成している生薬の薬効や薬能などを調べるために2時間ぐらいの予習が必要である。 また、学習した漢方薬については、参考図書などを利用し、理解を深めること。さらに関連する漢方薬についても

		配合生薬の組み合わせによる漢方薬の系統的な分類が説明できる。 【E2(10)①-3】 漢方医学における診断法、体質や病態の捉え方、治療法について概説できる。【E2(10)②-1】 日本薬局方に収載される漢方薬の適応となる証、症状や疾患について例示して説明できる。【E2(10)②-2】 現代医療における漢方薬の役割について説明できる。【E2(10)②-3】 漢方薬の副作用と使用上の注意点を例示して説明できる。【E2(10)③-1】 日本薬局方に収載されていない頻用漢方処方の適応となる証、症状や疾患について例示して説明できる。 【*】	参考図書などを用いて調べるために2時間が必要である。
4	水（津液）に関する生薬、漢方薬：五苓散、麦門冬湯など	（同上） 日本薬局方収載の代表的な生薬を列挙し、その基原、薬用部位を説明できる。【C5(1)②-1】 日本薬局方収載の代表的な生薬の薬効、成分、用途などを説明できる。【C5(1)③-1】 副作用や使用上の注意が必要な代表的な生薬を列挙し、説明できる。【C5(1)③-2】 漢方薬の薬効を構成生薬の薬能（古典的薬効）で説明できる。【*】 配合生薬の組み合わせによる漢方薬の系統的な分類が説明できる。 【E2(10)①-3】 漢方医学における診断法、体質や病態の捉え方、治療法について概説できる。【E2(10)②-1】	（同上） 指定した教科書に沿って授業を進めていくので、項目に挙がっていることについて教科書を熟読し、あらかじめ、漢方薬を構成している生薬の薬効や薬能などを調べるために2時間ぐらいの予習が必要である。 また、学習した漢方薬については、参考図書などを利用し、理解を深めること。さらに関連する漢方薬についても参考図書などを用いて調べるために2時間が必要である。

		日本薬局方に収載される漢方薬の適応となる証、症状や疾患について例示して説明できる。【E2(10)②-2】 現代医療における漢方薬の役割について説明できる。【E2(10)②-3】 漢方薬の副作用と使用上の注意点を例示して説明できる。【E2(10)③-1】 日本薬局方に収載されていない頻用漢方処方の適応となる証、症状や疾患について例示して説明できる。 【*】	
5	血に関する生薬、漢方薬：桂枝茯苓丸、当帰芍薬散など	(同上) 日本薬局方収載の代表的な生薬を列挙し、その基原、薬用部位を説明できる。【C5(1)②-1】 日本薬局方収載の代表的な生薬の薬効、成分、用途などを説明できる。【C5(1)③-1】 副作用や使用上の注意が必要な代表的な生薬を列挙し、説明できる。【C5(1)③-2】 漢方薬の薬効を構成生薬の薬能（古典的薬効）で説明できる。【*】 配合生薬の組み合わせによる漢方薬の系統的な分類が説明できる。【E2(10)①-3】 漢方医学における診断法、体質や病態の捉え方、治療法について概説できる。【E2(10)②-1】 日本薬局方に収載される漢方薬の適応となる証、症状や疾患について例示して説明できる。【E2(10)②-2】 現代医療における漢方薬の役割について説明できる。【E2(10)②-3】	(同上) 指定した教科書に沿って授業を進めていくので、項目に挙がっていることについて教科書を熟読し、あらかじめ、漢方薬を構成している生薬の薬効や薬能などを調べるために2時間ぐらいの予習が必要である。 また、学習した漢方薬については、参考図書などを利用し、理解を深めること。さらに関連する漢方薬についても参考図書などを用いて調べるために2時間が必要である。

		漢方薬の副作用と使用上の注意点を例示して説明できる。【E2(10)③-1】 日本薬局方に収載されていない頻用漢方処方の適応となる証、症状や疾患について例示して説明できる。【*】	
6	気に関する生薬、漢方薬 1：六君子湯、補中益気湯 など	(同上) 日本薬局方収載の代表的な生薬を列挙し、その基原、薬用部位を説明できる。【C5(1)②-1】 日本薬局方収載の代表的な生薬の薬効、成分、用途などを説明できる。【C5(1)③-1】 副作用や使用上の注意が必要な代表的な生薬を列挙し、説明できる。【C5(1)③-2】 漢方薬の薬効を構成生薬の薬能（古典的薬効）で説明できる。【*】 配合生薬の組み合わせによる漢方薬の系統的な分類が説明できる。【E2(10)①-3】 漢方医学における診断法、体質や病態の捉え方、治療法について概説できる。【E2(10)②-1】 日本薬局方に収載される漢方薬の適応となる証、症状や疾患について例示して説明できる。【E2(10)②-2】 現代医療における漢方薬の役割について説明できる。【E2(10)②-3】 漢方薬の副作用と使用上の注意点を例示して説明できる。【E2(10)③-1】	(同上) 日本薬局方収載の代表的な生薬を列挙し、その基原、薬用部位を説明できる。【C5(1)②-1】 日本薬局方収載の代表的な生薬の薬効、成分、用途などを説明できる。【C5(1)③-1】 副作用や使用上の注意が必要な代表的な生薬を列挙し、説明できる。【C5(1)③-2】 漢方薬の薬効を構成生薬の薬能（古典的薬効）で説明できる。【*】 配合生薬の組み合わせによる漢方薬の系統的な分類が説明できる。【E2(10)①-3】 漢方医学における診断法、体質や病態の捉え方、治療法について概説できる。【E2(10)②-1】 日本薬局方に収載される漢方薬の適応となる証、症状や疾患について例示して説明できる。【E2(10)②-2】 現代医療における漢方薬の役割について説明できる。【E2(10)②-3】

		日本薬局方に収載されていない頻用漢方処方薬の適応となる証、症状や疾患について例示して説明できる。【*】	漢方薬の副作用と使用上の注意点を例示して説明できる。【E2(10)③-1】 日本薬局方に収載されていない頻用漢方処方薬の適応となる証、症状や疾患について例示して説明できる。【*】
7	気に関する生薬、漢方薬 2：半夏厚朴湯、平胃散など	(同上) 日本薬局方収載の代表的な生薬を列挙し、その基原、薬用部位を説明できる。【C5(1)②-1】 日本薬局方収載の代表的な生薬の薬効、成分、用途などを説明できる。【C5(1)③-1】 副作用や使用上の注意が必要な代表的な生薬を列挙し、説明できる。【C5(1)③-2】 漢方薬の薬効を構成生薬の薬能（古典的薬効）で説明できる。【*】 配合生薬の組み合わせによる漢方薬の系統的な分類が説明できる。【E2(10)①-3】 漢方医学における診断法、体質や病態の捉え方、治療法について概説できる。【E2(10)②-1】 日本薬局方に収載される漢方薬の適応となる証、症状や疾患について例示して説明できる。【E2(10)②-2】 現代医療における漢方薬の役割について説明できる。【E2(10)②-3】 漢方薬の副作用と使用上の注意点を例示して説明できる。【E2(10)③-1】	(同上) 指定した教科書に沿って授業を進めていくので、項目に挙がっていることについて教科書を熟読し、あらかじめ、漢方薬を構成している生薬の薬効や薬能などを調べるために2時間ぐらいの予習が必要である。 また、学習した漢方薬については、参考図書などを利用して、理解を深めること。さらに関連する漢方薬についても参考図書などを用いて調べるために2時間が必要である。

		日本薬局方に収載されていない頻用漢方処方の適応となる証、症状や疾患 について例示して説明できる。 【*】	
8	寒熱に関する生薬、漢方薬 1：八味地黄丸、大建中湯 など	(同上) 日本薬局方収載の代表的な生薬を列挙し、その基原、薬用部位を説明できる。【C5(1)②-1】 日本薬局方収載の代表的な生薬の薬効、成分、用途などを説明できる。【C5(1)③-1】 副作用や使用上の注意が必要な代表的な生薬を列挙し、説明できる。【C5(1)③-2】 漢方薬の薬効を構成生薬の薬能（古典的薬効）で説明できる。【*】 配合生薬の組み合わせによる漢方薬の系統的な分類が説明できる。【E2(10)①-3】 漢方医学における診断法、体質や病態の捉え方、治療法について概説できる。【E2(10)②-1】 日本薬局方に収載される漢方薬の適応となる証、症状や疾患について例示して説明できる。【E2(10)②-2】 現代医療における漢方薬の役割について説明できる。【E2(10)②-3】 漢方薬の副作用と使用上の注意点を例示して説明できる。【E2(10)③-1】 日本薬局方に収載されていない頻用漢方処方の適応となる証、症状や疾患 について例示して説明できる。 【*】	(同上) 指定した教科書に沿って授業を進めていくので、項目に挙がっていることについて教科書を熟読し、あらかじめ、漢方薬を構成している生薬の薬効や薬能などを調べるために 2 時間ぐらいの予習が必要である。 また、学習した漢方薬については、参考図書などを利用し、理解を深めること。さらに関連する漢方薬についても参考図書などを用いて調べるために 2 時間が必要である。

9	寒熱に関する生薬、漢方薬 2：黄連解毒湯、白虎加人 参湯など	(同上) 日本薬局方収載の代表的な生薬を列挙し、その基原、薬用部位を説明できる。【C5(1)②-1】 日本薬局方収載の代表的な生薬の薬効、成分、用途などを説明できる。【C5(1)③-1】 副作用や使用上の注意が必要な代表的な生薬を列挙し、説明できる。【C5(1)③-2】 漢方薬の薬効を構成生薬の薬能（古典的薬効）で説明できる。【*】 配合生薬の組み合わせによる漢方薬の系統的な分類が説明できる。【E2(10)①-3】 漢方医学における診断法、体質や病態の捉え方、治療法について概説できる。【E2(10)②-1】 日本薬局方に収載される漢方薬の適応となる証、症状や疾患について例示して説明できる。【E2(10)②-2】 現代医療における漢方薬の役割について説明できる。【E2(10)②-3】 漢方薬の副作用と使用上の注意点を例示して説明できる。【E2(10)③-1】 日本薬局方に収載されていない頻用漢方処方薬の適応となる証、症状や疾患について例示して説明できる。【*】	(同上) 指定した教科書に沿って授業を進めていくので、項目に挙がっていることについて教科書を熟読し、あらかじめ、漢方薬を構成している生薬の薬効や薬能などを調べるために2時間ぐらいの予習が必要である。 また、学習した漢方薬については、参考図書などを利用し、理解を深めること。さらに関連する漢方薬についても参考図書などを用いて調べるために2時間が必要である。
10	五臓：心、肝に関する漢方薬 1：酸棗仁湯、加味帰脾湯など	(同上) 日本薬局方収載の代表的な生薬を列挙し、その基原、薬用部位を説明できる。【C5(1)②-1】	(同上) 指定した教科書に沿って授業を進めていくので、項目に挙がっていることについて教科書を熟読し、あらかじめ、漢

		日本薬局方収載の代表的な生薬の薬効、成分、用途などを説明できる。 【C5(1)③-1】 副作用や使用上の注意が必要な代表的な生薬を列挙し、説明できる。 【C5(1)③-2】 漢方薬の薬効を構成生薬の薬能（古典的薬効）で説明できる。【*】 配合生薬の組み合わせによる漢方薬の系統的な分類が説明できる。 【E2(10)①-3】 漢方医学における診断法、体質や病態の捉え方、治療法について概説できる。【E2(10)②-1】 日本薬局方に収載される漢方薬の適応となる証、症状や疾患について例示して説明できる。【E2(10)②-2】 現代医療における漢方薬の役割について説明できる。【E2(10)②-3】 漢方薬の副作用と使用上の注意点を例示して説明できる。【E2(10)③-1】 日本薬局方に収載されていない頻用漢方処方の適応となる証、症状や疾患について例示して説明できる。 【*】	方薬を構成している生薬の薬効や薬能などを調べるために 2 時間ぐらいの予習が必要である。 また、学習した漢方薬については、参考図書などを利用し、理解を深めること。さらに関連する漢方薬についても参考図書などを用いて調べるために 2 時間が必要である。
11	五臓：心、肝に関する漢方薬 2：抑肝散、釣藤散、加味逍遥散など	（同上） 日本薬局方収載の代表的な生薬を列挙し、その基原、薬用部位を説明できる。【C5(1)②-1】 日本薬局方収載の代表的な生薬の薬効、成分、用途などを説明できる。 【C5(1)③-1】 副作用や使用上の注意が必要な代表的な生薬を列挙し、説明できる。 【C5(1)③-2】	（同上） 指定した教科書に沿って授業を進めていくので、項目に挙がっていることについて教科書を熟読し、あらかじめ、漢方薬を構成している生薬の薬効や薬能などを調べるために 2 時間ぐらいの予習が必要である。

		漢方薬の薬効を構成生薬の薬能（古典的薬効）で説明できる。【*】 配合生薬の組み合わせによる漢方薬の系統的な分類が説明できる。 【E2(10)①-3】 漢方医学における診断法、体質や病態の捉え方、治療法について概説できる。【E2(10)②-1】 日本薬局方に収載される漢方薬の適応となる証、症状や疾患について例示して説明できる。【E2(10)②-2】 現代医療における漢方薬の役割について説明できる。【E2(10)②-3】 漢方薬の副作用と使用上の注意点を例示して説明できる。【E2(10)③-1】 日本薬局方に収載されていない頻用漢方処方の適応となる証、症状や疾患について例示して説明できる。 【*】	また、学習した漢方薬については、参考図書などを利用し、理解を深めること。さらに関連する漢方薬についても参考図書などを用いて調べるために2時間が必要である。
12	痛みを治療する漢方薬：芍薬甘草湯、疎経活血湯など漢方薬のエビデンスに基づいた使用例について	痛みに対する漢方的治療の考え方を説明できる。【*】 配合生薬の組み合わせによる漢方薬の系統的な分類が説明できる。 【E2(10)①-3】 漢方医学における診断法、体質や病態の捉え方、治療法について概説できる。【E2(10)②-1】 日本薬局方に収載される漢方薬の適応となる証、症状や疾患について例示して説明できる。【E2(10)②-2】 現代医療における漢方薬の役割について説明できる。【E2(10)②-3】	（同上） 指定した教科書に沿って授業を進めていくので、項目に挙がっていることについて教科書を熟読し、あらかじめ、漢方薬を構成している生薬の薬効や薬能などを調べるために2時間ぐらいの予習が必要である。 また、学習した漢方薬については、参考図書などを利用し、理解を深めること。さらに関連する漢方薬についても参考図書などを用いて調べるために2時間が必要である。

		漢方薬の副作用と使用上の注意点を例示して説明できる。【E2(10)③-1】 日本薬局方に収載されていない頻用漢方処方の適応となる証、症状や疾患 について例示して説明できる。 【*】	
13	がん化学療法の副作用軽減に用いられる漢方薬：六君子湯、牛車腎気丸、半夏瀉心湯など	がん治療に対する漢方的アプローチを説明できる。【*】 配合生薬の組み合わせによる漢方薬の系統的な分類が説明できる。【E2(10)①-3】 漢方医学における診断法、体質や病態の捉え方、治療法について概説できる。【E2(10)②-1】 日本薬局方に収載される漢方薬の適応となる証、症状や疾患について例示して説明できる。【E2(10)②-2】 現代医療における漢方薬の役割について説明できる。【E2(10)②-3】 漢方薬の副作用と使用上の注意点を例示して説明できる。【E2(10)③-1】 日本薬局方に収載されていない頻用漢方処方の適応となる証、症状や疾患 について例示して説明できる。 【*】	(同上) 指定した教科書に沿って授業を進めていくので、項目に挙がっていることについて教科書を熟読し、あらかじめ、漢方薬を構成している生薬の薬効や薬能などを調べるために 2 時間ぐらいの予習が必要である。 また、学習した漢方薬については、参考図書などを利用し、理解を深めること。さらに関連する漢方薬についても参考図書などを用いて調べるために 2 時間が必要である。
14	泌尿器科領域で使用される漢方薬：八味地黄丸、牛車腎気丸、清心蓮子飲など	漢方医学での水液代謝を説明できる。【*】 配合生薬の組み合わせによる漢方薬の系統的な分類が説明できる。【E2(10)①-3】	(同上) 指定した教科書に沿って授業を進めていくので、項目に挙がっていることについて教科書を熟読し、あらかじめ、漢方薬を構成している生薬の薬効や薬能などを調べるために 2

		漢方医学における診断法、体質や病態の捉え方、治療法について概説できる。【E2(10)②-1】 日本薬局方に収載される漢方薬の適応となる証、症状や疾患について例示して説明できる。【E2(10)②-2】 現代医療における漢方薬の役割について説明できる。【E2(10)②-3】 漢方薬の副作用と使用上の注意点を例示して説明できる。【E2(10)③-1】 日本薬局方に収載されていない頻用漢方処方薬の適応となる証、症状や疾患について例示して説明できる。 【*】	時間ぐらいの予習が必要である。 また、学習した漢方薬については、参考図書などを利用し、理解を深めること。さらに関連する漢方薬についても参考図書などを用いて調べるために2時間が必要である。
15	皮膚科領域で使用される漢方薬：温清飲、十味敗毒湯、越婢加朮湯など	皮膚炎や痒みに対する漢方的治療の考え方を説明できる。【*】 配合生薬の組み合わせによる漢方薬の系統的な分類が説明できる。 【E2(10)①-3】 漢方医学における診断法、体質や病態の捉え方、治療法について概説できる。【E2(10)②-1】 日本薬局方に収載される漢方薬の適応となる証、症状や疾患について例示して説明できる。【E2(10)②-2】 現代医療における漢方薬の役割について説明できる。【E2(10)②-3】 漢方薬の副作用と使用上の注意点を例示して説明できる。【E2(10)③-1】 日本薬局方に収載されていない頻用漢方処方薬の適応となる証、症状や疾患について例示して説明できる。 【*】	(同上) 指定した教科書に沿って授業を進めていくので、項目に挙がっていることについて教科書を熟読し、あらかじめ、漢方薬を構成している生薬の薬効や薬能などを調べるために2時間ぐらいの予習が必要である。 また、学習した漢方薬については、参考図書などを利用し、理解を深めること。さらに関連する漢方薬についても参考図書などを用いて調べるために2時間が必要である。

配信大学：大阪医科薬科大学 薬学部